

2026年 いざ世界遺産登録へ！

「飛鳥・藤原の宮都」の構成資産を紹介します

●大官大寺跡（だいかんだいじあと）

藤原京の^{ごぼん}碁盤の目状の区画内に計画的に建てられた、日本で最初の国家寺院（官寺）です。国家寺院とは、天皇などの発願によって国が建てて管理したお寺のことです。川原寺・飛鳥寺と並ぶ三大官寺のリーダーとして、飛鳥の地で繁栄していました。

発掘調査の結果、金堂は藤原宮大極殿にも及ぶ大きさで、699年に建てられた九重塔は高さ約80mにのぼったと推定されており、当時の日本列島で最大規模の寺院であったことが分かります。

九重塔は、百済や新羅、北魏にもあったことが分かっています。当時の東アジアの国々の国家寺院に採用された象徴的な建物であり、中国・朝鮮半島の影響を受けて建てられていることを示しています。平城京へ遷都後は、大安寺として移転・改称し、現在まで法灯を伝えています。



▲伽藍配置イメージ（株式会社アスカラボ）



均整唐草文軒平瓦
（所蔵：東京国立博物館）



複弁蓮華文軒丸瓦
（所蔵：京都国立博物館）

出典：ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)

●天武・持統天皇陵古墳（てんむ・じとうてんのうりょうこふん）

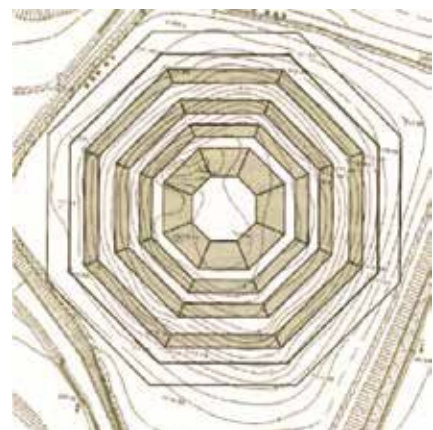
中国思想の影響を受け、天皇の絶対的な権力を表すために日本独自につくり出された八角墳です。墳丘は五段の構造で土を突き固めてつくられていました。また、表面は当時の最新技術で精密に加工された切石で覆われ、墳丘の裾周囲には石が敷かれていたことが分かっています。

鎌倉時代の盗掘の聞取調書である『^{あおきのさんりょうき}阿不幾乃山陵記』の写しが明治時代に発見されました。記されていた詳細な記録によって、天武・持統天皇が合葬されたお墓であることが特定され、1881年に宮内省が^{ひのくまおうちのみさぎ}「檜隈大内陵」として治定し、現在は宮内庁が管理しています。記録から、埋葬施設は横口式石室であり、天武天皇が眠る^{きょうちよかん}夾紵棺（布を漆で塗り固めてつくった最高級の棺）と、持統天皇の骨蔵器が石室内に並べて置かれていたことも分かりました。持統天皇は、天皇として初めて火葬された人物です。

天武・持統天皇陵古墳は、藤原宮の中核である朱雀大路の延長線上に明確に配置されており、緻密な計画と設計のもと、藤原宮と一体的に造営されたことを示しています。



▲朱塗り棺と金銅製の骨蔵器の復元
（提供：奈良文化財研究所）



▲墳丘想定図